法華経と浄土

ジェローム・デュコール

世界の宗教の中で、仏教には際立った特徴があります。それは、最初の三世紀間、書かれた聖典もなければ開祖を表した像もなかったということです。歴史上、キリスト紀元（西暦）の始まり頃になってはじめて、そうした聖像の発展や、インド亜大陸でのサンスクリット聖典、スリランカでのパーリ聖典の成立が見られたのです。そして、「大いなる乗り物」すなわち大乗仏教の発展は、これらの出現と並行した現象でした。大乗は「悟りは万人に可能である」と主張した「仏教の拡大形態」です。

大乗の「哲学的側面」と「仏身論」

大乗仏教は特に、その「一切皆空」の主張によって知られています。これは中観派の「二空」（人空・法空）の教義によって先鋭化されました。すなわち〔個人としての〕「人」（*pudgala*）も、その構成要素たる「法」（*dharma*）も空であるということです。十九世紀以来、長年の間、西洋の学者の注目を集めてきたのは、何にもまして、この哲学的側面でした。しかしながら、彼らはそれによって、もうひとつの側面の多くを無視し

てきたのです。それは大乗仏教にとって少なくとも同程度に重要な側面でした。すなわち、その宇宙論であり仏身論です。それは、この世界を超絶した（出世間の *lokottara*）仏陀像へと、どんどん傾いていきました。

大乗仏教が本来もつ、この二つの側面――哲学的側面と仏陀学（buddhalogy）の側面――については、大家であるエティエンヌ・ラモット[1]が、西暦一四七年から二九七年の間に中国語訳されたものとして光を当てた多くの仏典に示されています。この翻訳が中国において大乗仏教の基礎を固めたわけですが、それは中国での仏教の浸透そのものと同時に進行したのです。[2]

これら初期大乗経典の中には、言うまでもなく、般若経典群の『八千頌般若経』『二万五千頌般若経』があります。これらの経の礎石の上に中観派哲学が成立したのです。それだけではありません。さらに『般舟（はんじゅ）三昧経』『無量寿経』『維摩経』『法華経』があります。これらは初期大乗経典の第二グループであり、仏陀が超絶的な存在になったことを証言している聖典です。

忘れてならないのは、仏教では通例、第一に「特定の宇宙に、同時には一人の仏しか存在できない」と考えられており、第二に「釈迦牟尼以前にも諸仏がおられたし、同様に釈迦牟尼以後の未来にもおられるであろう」と考えられているということです。ところが、大乗仏教が際立っているのは、我々の宇宙の周辺の宇宙に他の諸仏の存在を認め、さまざまな方法で交信もできるし、あるいは、来世でそれらの仏のもとに生まれることもできると主張する点です。この点に関して、『大智度論』の例は特に重要です。これは鳩摩羅什によって、四〇四年から四〇六年の間に漢訳されましたが、この四〇六年というのは、彼が『法華経』を訳出した年でもあります。『大智度論』では、現在おられる諸仏（現在仏）、十方世界の諸仏（十方仏）、他の宇宙の諸仏（他方仏）など、自ら司る領域（仏土）をもつそれぞれの仏について、くわしく説明しています。[3]

「浄土を得んと欲せば、心を浄むべし」

周知のように、これらの仏土の中で、中国から日本にかけて多くの信徒を獲得することになるのはアミ

ターバ（日本語では阿弥陀）という仏の仏土です。しかしながら、この流伝の間に、天台宗がこれを法華経と関連づけました。[4] 現在でも、この宗派では、毎日の礼拝を、朝は法華経に心身を傾注し、夕べは阿弥陀仏を敬い奉るというかたちで行っています（朝題目・夕念仏）。

法華経自体が、この関連性を証言しています。第二十三章（薬王菩薩本事品）で、釈迦牟尼はこう語ります。

「若し如来の滅後、後の五百歳の中に、若し女人有って、是の経典を聞いて、説の如く修行せば、此に於いて命終（みょうじゅう）して、即ち安楽世界の阿弥陀仏・大菩薩衆の圍遶（いにょう）せる住処に往きて、蓮華の中の宝座の上に生じ……」[5]

しかし、法華経は別の理由で、さらに有名です。極楽は阿弥陀仏によって浄められた浄土で、釈迦牟尼の仏土である私たちの娑婆世界の外に位置しています。娑婆世界は、煩悩の汚れに満ちていますが、法華経の第十一章（見宝塔品）にいたって真実が明かされることになります。というのは、多宝如来の宝塔を開くために、釈迦牟尼はまず、十方世界で説法している自身の分身諸仏を集めねばならず、諸仏が釈迦牟尼のもとに来集してくると、娑婆世界は汚れた世界でなくなるのです。「時に娑婆世界は、即ち変じて清浄なり」[6]と。

それに関して、天台が「法華三部経」と呼んだうちの第三『仏説観普賢菩薩行法経』では、釈迦牟尼の浄土を「常寂光」と名づけ、釈迦牟尼自身は「毘盧遮那」と呼ばれています。[7] それゆえ、これは私たちに、東アジアの大乗仏教で著名なもう一つのテキスト『華厳経』と、その〝宇宙的〟仏陀・毘盧遮那仏ならびにその〝蓮華蔵世界〟を思い起こさせます。

しかしながら、「釈迦牟尼の国土は、最初はそれほど汚れたものではなかった」という大乗仏教の教義は、維摩経の第一章「仏国品」の中で、雄弁に表現されています。仏陀はこう述べるのです。「もし菩薩、浄土を得んと欲せば、まさにその心を浄むべし。その心の浄きに随って、すなわち仏土浄し」[8]

No Image

この有名な説法は、中国において、阿弥陀仏とその浄土についての内在的な解釈をもたらしました。しかし、この説法を聞いた弟子・舎利弗を混乱させるものでもありました。すなわち、舎利弗は「仏土の清らかさが〔菩薩の〕心の清らかさに基づいているのであれば、釈迦牟尼が〔菩薩として〕自身の国土である我々の宇宙を築いたとき、その意図は汚れていたことになる。この土〔娑婆世界〕はかくも汚れているのだから」と考えたのです。[9] 舎利弗の思いを知った釈迦牟尼は、彼に対して、娑婆世界は本来清浄であることを教えます。[10] もっとも、その説き方は法華経の説法よりも直接的で散文的でしたが。

そして釈迦牟尼が足の指で大地を押すと、直ちに、

「平家納経」より。法華経提婆達多品第十二の部分の最初に描かれた見返し絵。見宝塔品第十一で娑婆世界が浄土となった後、舞台は虚空会に移る。この絵では、八歳の竜女が海中から現れ、雲上の虚空にいる釈迦仏に宝珠を献じようとしている。この後、竜女は成仏の姿を現じる。「女人成仏」の手本として、同品は広い人気を博した

（国宝　広島県・厳島神社所蔵。１１６４年奉納。提供　便利堂　禁複製）

三千大千世界が幾百幾千の珍宝で荘厳され、まるで宝荘厳仏の仏土「無量功徳宝荘厳土」のようになりました。釈迦牟尼は舎利弗に「我が仏土は常にこのように清らかなのだ。最も劣った衆生を救いたいがために、悪に満ちた不浄の国土のように見せているのだ」と教えます。釈迦牟尼がその聖なる足を引き上げると、娑婆世界は再び、もとの姿になりました。(11)

浄土経の聖典もまた、この浄土はすぐ近くにあると述べています。〔浄土三部経のうち〕『阿弥陀経』が、極楽浄土は「ここから西方へ、十万億の仏土を過ぎた彼方にある」と主張している一方、『観無量寿経』の主張としては「阿弥陀仏は、はるか遠いところにおられるのではない」というのです。そして『無量寿経』もまた、説法の聴衆が阿弥陀仏とその浄土の姿を見るという報いが得られる方法を説いています。その結果、「集った大衆は瞬時にそれらすべてを見ました。そして浄土の会衆もまた同様に我々の世界を見たのです」とあります。(12)

次のように言えば十分でしょう。悟りの超越性という観点から見れば、すべては相対的なのだと！

浄土和讃の中の法華経

日本では、十一世紀になる頃に、僧・源信（九四二－一〇一七年）が、阿弥陀仏の浄土の伝統と結びつけるなど、天台宗の教義に重要な寄与をしました。そして別の天台宗の僧・法然（一一三三－一二一二年）が、天台以外の浄土思想の流れから中国の師僧・善導（六一三－六八一年）を見出したのも、源信を通してでした。四半世紀後、法然は、日本で善導の教えを確立することを企図し、「浄土宗」として天台宗から独立しました。

そして彼は、法華経は『観無量寿経』――それは善導の中心的依経でした――に付随する経典にすぎないという主張を展開しました。(13) 詳細は省きますが、法華経の最高の唱道者であった日蓮（一二二二－一二八二年）が、主な攻撃の対象としたのが法然であったことを、我々は思い起こします。

法然は親鸞（一一七三－一二六三年）の師として知られています。親鸞は、〔法然が善導を見出したように〕中国

の別の師僧・曇鸞（四七六－五四二年）を再発見しました。曇鸞の著作が親鸞に大きな影響を与えた結果、親鸞自身の教えは別の流派「浄土真宗」を形成するに至りました。

とはいえ、親鸞は法然に出会う前に、九歳の時から天台宗の中で二十年を過ごしているのです。だからこそ、彼が多大な著作の中で一度も法華経に言及していないことは、実に驚くべきことです。しかしながら、彼の『浄土和讃』には、関連する重要な一首があります。

「久遠実成阿弥陀仏
五濁の凡愚をあはれみて
釈迦牟尼仏としめしてぞ
迦耶城には応現する」[14]

これは、法華経の最も有名な教えのひとつに私たちを引き戻します。第十五章「従地涌出品」において、弥勒菩薩は、釈迦牟尼が悟りを得てから「さほど時間がたっておらず」（未だ久しからず）、法華経を説かれる四十年前のことであるから、むしろ「はなはだ最近のことである」（甚だ近し）と繰り返し指摘します。しかし、有名な次の第十六章「如来寿量品」で、仏陀は次のように意外な真実を示すのです。

「一切世間の天・人、及び阿修羅は、皆な今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂えり。
然るに善男子よ。我れは実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり。（中略）是の如く我れは成仏してより已来、甚だ大いに久遠なり。寿命は無量阿僧祇劫にして、常住にして滅せず」[15]

親鸞は〔この和讃で〕法華経の名を明示してはいないものの、法華経〔の概念・久遠実成〕を引いて、釈迦牟尼を〔久遠に成仏した〕阿弥陀仏の応現仏（応身）として描いています。親鸞が法華経について語らなかった一方で、彼の子孫〔孫〕である存覺（一二九〇－一三七三年）

は浄土真宗の教義解説において、法華経の教えの核心部分（本門）における釈迦牟尼は阿弥陀仏と一体であると説明するようになりました。[16]

法華経で釈迦牟尼は自身の長大な寿命を明らかにした後、最後に次のように語ります。

「衆生は劫尽きて　大火に焼かるると見る時も
　我が此の土は安穏にして（中略）
　我が浄土は毀れざれども　衆は焼け尽きて
　憂怖諸の苦悩　是の如き悉く充満せるを見る」[17]

ここでは、ある意味で、大乗の教義における「悟りの超絶的側面」が「私たちの宇宙の虚妄さを説く側面」と調和したかたちで要約されているわけです。すなわち二諦〔二つの真実〕――「絶対的真実〔真諦／究極的次元から見た真理〕」と「相対的真実〔俗諦／世俗的次元の真理〕」との調和が示されているのです。

※〔　〕内は邦訳に際しての補注

注

（1）（訳注）Étienne Lamotte（一九〇三－八三）。ベルギーの仏教学者。ルーヴァン・カトリック大学教授。パーリ語、サンスクリット、中国語、チベット語に通じていた。『大智度論』『維摩経』『首楞厳経』のフランス語訳でも知られる。

（2）以下を参照：*La concentration de la marche héroïque* (*Śūraṃgamasamādhisūtra*), 1965, Institut belge des hautes études chinoises, pp. 44-45.
（訳注）同書は、Étienne Lamotteによる『首楞厳三昧経（首楞厳経）』の翻訳並びに研究書である。一九九九年に英訳（*Śūraṃgamasamādhisūtra, The Concentration of Heroic Progress*）が発刊されている。中国への仏教伝来は一世紀頃とされる。つまり、ここでいう二～三世紀の大乗仏典翻訳は、中国における仏教の草創期の出来事であり、中国においては仏教の流布と大乗仏教の確立が同時に進行したことになる。この間の主な翻訳者には、支婁迦讖（『般舟三昧経』など）、支謙（『維摩詰経』など）、康僧会（『六度集経』など）、康僧鎧（『仏説無量寿経』など）、竺法護（『光讃般若経』『正法華経』など）らがいる。

（3）Étienne Lamotteによる仏訳『大智度論』を参照。*Le Traité de la grande vertu de sagesse de Nāgārjuna, Mahāprajñāpāramitāśāstra, traduit en chinois par Kumārajīva*, Bureaux du Muséon, Louvain, vol. 1, 1944, pp.

300-306, 485, 531-557.

（4）（訳注）天台大師智顗は『摩訶止観』巻二で示した四種三昧のひとつ「常行三昧」の中で、九十日の間、阿弥陀仏の名を称え続け、心に阿弥陀仏を念じ続ける修行を説いている。

（5）『妙法蓮華経並開結』創価学会、二〇〇二（以下、『法華経』と略記）、五九八－九頁

（6）『法華経』三七八頁

（7）「釈迦牟尼仏は、毘盧遮那遍一切処と名づけたてまつる。其の仏の住処は、常寂光と名づく」（『法華経』七一八頁）

（8）鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』。「若菩薩欲得淨土當淨其心。隨其心淨則佛土淨」（大正大蔵経第十四巻、五三八頁下）

（9）「爾時舍利弗。承佛威神作是念。若菩薩心淨則佛土淨者。我世尊本爲菩薩時意豈不淨。而是佛土不淨若此」（同）

（10）「佛知其念即告之言。於意云何。日月豈不淨耶。而盲者不見。對曰不也。世尊。是盲者過非日月咎。舍利弗。衆生罪故不見如來佛土嚴淨。非如來咎（仏、その念いを知り、すなわち、これに告げてのたまわく「意においていかん。日月は豈不浄ならんや。しかも盲者は見ず」。こたえて曰く「不なり。世尊、これ盲者のとがにして、日月のとがには非ず」。「舍利弗、衆生の罪の故に、如来の仏土の荘厳なるを見ず。如来の咎には非ず」）」（同）

（11）「於是佛以足指按地。即時三千大千世界若干百千珍寶嚴飾。譬如寶莊嚴佛無量功德寶莊嚴土。一切大衆歎未曾有。而皆自見坐寶蓮華。佛告舍利弗。汝且觀是佛土嚴淨。舍利弗言。唯然世尊。本所不見。本所不聞。今佛國土嚴淨悉現。佛語舍利弗。我佛國土常淨若此。爲欲度斯下劣人故。示是衆惡不淨土耳（中略）佛攝神足。於是世界還復如故」（同五三八－九頁）

（12）『阿彌陀經』：「從是西方過十萬億佛土」（大正大蔵経第十二巻、三四六頁下）、『佛說觀無量壽佛經』：「阿彌陀佛去此不遠」（同、三四一頁下）、『佛說無量壽經』：「此會四衆一時悉見。彼見此土亦復如是」（同、二七八頁上）。

（13）Jérôme Ducor, *Hônen : Le gué vers la Terre Pure (Senchaku-shû)*, Paris, Librairie Arthème Fayard, 2005, pp. 168-169.（訳注）法然『選択本願念仏集』のフランス語訳。同書は小西国際交流財団の二〇〇八年度「日仏翻訳文学賞」を受賞している。

（14）『浄土和讃』第八八。「諸経讃」九首のひとつ。『定本親鸞聖人全集』第二巻（法蔵館、一九六九年）、五四頁。新字に改めた。

（15）『法華経』四七七－八頁、四八二頁

（16）Jérôme Ducor, *La vie de Zonkaku, religieux bouddhiste japonais du XIIe siècle*, Paris, Maisonneuve & Larose, 1993, pp. 181-183.（訳注）筆者によるフランス語の著作『十

四世紀日本の僧・存覚の生涯』。子息・慈観による聞き書き『存覚上人一期記』の翻訳ならびに彼の著作の解説も含まれている。

(17) 『法華経』四九一－二頁

Jérôme Ducor／パリの仏教学研究所（Institut d'Etudes Bouddhiques）総裁。スイスのローザンヌ大学とジュネーブ大学教員。ジュネーブ民族博物館（Musée d'ethnographie de Genève）東洋部長。ローザンヌ大学で仏教を学び始め、ジュネーブ大学で博士号を取得。西本願寺の教師の資格をもち、ジュネーブにあるスイス浄土真宗協会（信楽寺／Société bouddhique suisse Jôdo-Shinshû）を拠点としている。